

委員会視察記録

委員会名	富士山保全・適正活用推進特別委員会					
期 間	令和7年9月11日(木)～9月12日(金)					
参加者	委員長	良知	淳行	副委員長	四本	康久
	副委員長	勝俣	昇	委 員	岩田	徹也
	委 員	野田	治久	委 員	西原	明美
	委 員	天野	一	委 員	川崎	和子
	委 員	松井	優介			
	委 員	蓮池	章平			
視察先	1 山梨県富士山科学研究所（山梨県富士吉田市） 2 山梨県立富士山世界遺産センター（山梨県南都留郡富士河口湖町） 3 富士スバルライン五合目（山梨県富士吉田市）					

視察の概要

9月11日(木)

■山梨県富士山科学研究所

<概要>

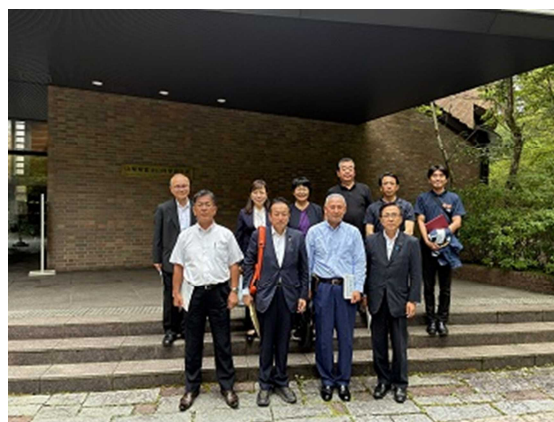
研究所の前身は、平成9年に設置された環境科学研究所。世界文化遺産に登録された富士山の顕著な普遍的価値を保存管理し活用していくとともに、富士山の火山防災対策に取り組むために、富士山の自然環境をさらに深く研究する必要があることから平成26年に「富士山科学研究所」へ改編された。施設としては、富士山サイエンスラボや環境情報センターがある本館と、自然環境・共生研究科と富士山火山防災研究センターがある研究棟、生物観察園、自然観察路がある。

研究機能、教育・情報機能、広報・交流機能の3つの機能を好循環させ、研究成果の見える県民に開かれた研究所を目指している。研究機能としては、自然環境、環境共生、火山防災の3分野ごと、富士山を研究フィールドの主体としながら基礎研究等を行っている。教育・情報発信機能としては、富士山に関する学習プログラムの開発、学校が行う富士山学習への支援等を行っている。広報・交流機能としては、研究成果の発信やイベント・公開講座等を実施している。

<主な質疑応答>

Q 県の施策に研究成果が反映されるのか。

A 研究成果が施策に反映されるというより、政策課題になったものを研究している。こういった課題を解決したいというオーダーに基づいて研究しており、例えば、富士山の五合目以上は電気が来ておらず、通信環境もよくないため、通信に関する研究を行って事業化しようとしている。そのほかにも、山梨県ではシカの食害が課題となっているた



め、シカの出現箇所を把握するシステムをつくり、そのデータを猟友会に提供することで捕獲数の増加につなげるといった取組を行っている。

Q 登山者に対する火山安全対策の現状は。

A 山梨県側では、下山道に10基程度のシェルターを設置する計画があり、今年度は2基設置予定。開山期はガイドをつける登山者が多いため、ガイドの認定講座で、富士山の防災対策や避難方法等についてレクチャーしている。有事の際の情報ルートとしては、気象庁→五合目管理センター→山小屋→ガイドとなり、ガイドが先導して避難することになるが、ガイドは民間人であり、一緒に避難した人が亡くなった場合、訴えられる可能性がある。そのため、山梨県では山小屋の方を機能別消防団員とすることで、有事の際の避難誘導を担ってもらえるようにしている。現在、山梨県側も静岡県側も五合目の電波は下から上げている状況であり、有事の際、登山者が一斉に携帯を使用すると回線がパンクし、情報伝達ができない可能性がある。昨年度の「やまなし火山防災イノベーションピッチコンテスト」の採択業者が、ライン登録するとマップと災害情報を組み合わせたものを受け取れる仕組みを構築したり、ブルートゥース等の微弱電波を計測することで、富士山のどこにどれくらいの人がいるかを把握する取組を行っている。

9月12日（金）

■山梨県立富士山世界遺産センター

<概要>

開設は平成28年6月22日。世界文化遺産である富士山の顕著な普遍的価値に関する情報発信や保存管理の中心的役割を担っている。主要業務は、富士山憲章推進会議事務や富士山レンジャー業務、調査・研究業務や企画展・富士山講座の企画運営、広報や教育旅行の誘致や受入。

今年度から、富士山レンジャーを会計年度任用職員ではなく3年の任期付一般職員とした。今期の吉田ルートに登山者は約14万3千人で、そのうち1,144人に対して指導を行った。内容としては、雨具の不携帯が多く、指導を聞かず突破するような事例はなかった。

富士山レンジャーの課題の1つは、年間業務量の平準化。パトロールや啓発事業にも力を入れたいが、夏は安全登山指導に多くのリソースを取られてしまうなど、年間を通じた業務量の平準化が難しい。課題の2つ目は、富士山レンジャーのなり手不足。次代を担う富士山レンジャーの育成が課題。

<主な質疑応答>

Q オーバーツーリズムを感じる場面はあるか。

A 9月10日が閉山日であり、10日は登山客であふれかえっていた。8月は多かったがヨーロッパ圏が9月から新学期のため、9月に入って落ち着いた印象。生活面では、渋滞やスーパーに外国人の方が多く来ていた印象がある。

Q 富士山レンジャーが登山を規制する際の判断基準となるものはあるのか。

A 装備の点検については、3つの基準（①上下セパレートタイプの雨具、②防寒着、③登山に適した靴）があるが、登山者の経験等も踏まえた上で、富士山レンジャーが現場で判断している。装備がない場合は、売店で購入やレンタルしていただく。



Q 富士山レンジャーは、強風等の気象を考慮した指導も行っているのか。

A 気象を考慮した指導も行っている。また、悪天候時はスバルラインの通行止めやゲート自体が閉められることもある。

■富士スバルライン五合目

(山梨県観光文化・スポーツ部富士山観光振興グループ)

<概要>

富士山の世界文化遺産登録については、I COMOSから3つの課題（①人が多いため登山者数のコントロールが必要、②人工的景観が目立つため景観の改善が必要、③環境負荷が大きいため排気ガスの抑制が必要）を与えられたと認識している。解決すべき主な課題としては、混雑の偏り、弾丸登山、登山道やトイレにおけるマナー・ルール違反が挙げられる。



登山規制のためのゲートについては、道路の指定を外し、公の施設とすることで設置を可能とした。

今後の大きな課題は、静岡県側との開山日の統一。現在は、須走口が開山するまでは下山道が使用できないため、登山者と下山者が狭い登山道を共用するという危険な状態であり、改善できればと考えている。

<主な質疑応答>

Q 下山時に間違っ須走口に下りてきてしまう人が多いが、その対策は。

A 下山者が多い時間帯は、誘導員を配置している。また、センサーを設置して人が通過すると、分岐点であることをお知らせする自動音声流れるようにしている。看板も設置しているが、疲れていて見逃してしまう人も多いのではと思う。富士山アプリを入れてもらい、間違いやすいポイント等を伝えている。

Q 令和6年度の登山者数は1日4,000人を超えた日がなく、多い日でも3,000人強くらいにおさまっているが、その理由は。また、令和6年度の登下山道使用許可者数が約15万人とのことだが、適正な人数と考えているのか。

A 4,000円の入山料の徴収が始まったことが理由ではないかと考えている。人数については、I COMOSの指摘を受けて両県で適正人数の調査を行った。吉田口については1日4,000人を超えると過度な混雑が発生して危険とのことであり、現状は登山者数をコントロールできていると認識している。